黒嶋智美
玉川大学

行為構築の資源としての味覚

オンライン・シンポジウム
「ことば・認知・インタラクション10」
3.10.2022

行為構築の資源としての味覚

- 何かを味わうことによって知覚する味覚を通してどのような活動への参加が可能になっているのか？
- 味覚をとおして構築される行為の分析によって，その味覚の帰属可能性(Nishizaka, 2017)や資源としての味覚が特定の行為の産出の基盤となっていることを示す
- 他の知覚と同様に，味覚も知識の源泉となったり，行為構築の資源となる(cf. Cekaite & Mondada, 2020; Goodwin, 1994; 1997; Kuroshima, 2020; 黒嶋, 2020; Nishizaka, 2021, 2022)
- 個人に帰属可能な味覚も相互行為のなかでは個人に閉ざされた主観的な感覚ではなく社会的基準のもとに理解される

背景：相互行為のなかの味覚の連鎖的記述

- 先行研究では味わうことの連鎖的過程が相互行為の中心的活動としてなされる場面を分析したものが多数
  - チーズの購入に先立つ判断のために先立ってなされる個別の活動としてのテイスティング（Mondada, 2018)とその行為連鎖の編成（Mondada, 2021）
  - 子どもに食べさせる活動で養育者が産出する味わうときの表現 “mmmh”が乳児の社会化にとってモデルとして寄与する（Wiggins & Keevallik, 2019）
  - 即時的な反応としての非語彙的表現 “mmm”による味覚を楽しむことの表明（Wiggins, 2002）
- 味覚が特定の行為の資源として用いられる事例の分析はまだあまりない
- **RQ：味わうことをすることdoing tastingが参与者にとってどのように特定の行為構築の資源となっているのか？**
  1）知識，２）共感，３）義務 にかんする行為と行為連鎖の構築

データ・分析の焦点

- 約4時間の友人同志５名の買い物，夕食の会話の録音・録画（研究者グループのコーパス）
- ホスト2人（日本人・スイス人）がそれぞれの国の料理をフルコースで用意し，ゲストの3人（日本人）にふるまう名目とデータのための収録
  - ファビアン，リカ，ミズキ，テル，ケン（リカとテルは夫婦）
- 共通語としての英語と日本人同志の日本語による相互行為
- 参与者の味覚が様々な行為の構築に用いられ，特定の参加の仕方を可能にしている場面を断片化
- データはすべて会話分析の転記方法で書き起こし事例分析（Jefferson, 2004; Mondada, 2019）

１．味覚を資源とする知識にかんする行為連鎖（同定・評価）の構築

(1) ゴートチーズ [cdin01][13:20]((シャンペーンで乾杯し夕食を始めたところ.直前でファビアンが自分が用意した多種のタパスについて説明をしていた.))

```
01                  (5.0)((ミズキがパンにチーズが載せられたタパスを食す.))
02 MIZ:             mm:. *it's go::od.
   miz                      *右手で持ったタパスを見ている
03                  (2.0) *(0.5)
   miz                      *ファビアンを見る-->>
04 MIZ:→            this is a goat cheese?
05                  +(1.0)
   fab              +目を閉じて頭をかしげる
06 FAB:→            +no:: I use *Philadelphia.
   fab              +頭を横に振り不満げな表情でミズキを見る
   miz                          *タパスを見る
07                  *(.)
   miz              *上を見る
08 MIZ:→            あ, *フィラデルフィ[ア.
   miz                 *うなづく
09 RIK:                                [huh huh huh huh
10                  *+(1.5)
   miz              *ファビアンを見ながら数回うなづく
   fab               +頭をかしげて不満そうな表情をする
11 MIZ:             bu-*(.) you-[you- you: *bought it]
   miz                 *下を見る          ,,,,*ファビアンを見る-->>
12 FAB:                        +[but it works we::ll.]
   fab                          +上を見てからミズキをみる-->>
```

味覚を資源とした評価のデモンストレート
(gustatory pleasure vocalization+記述的評価＋身体)

味覚を資源とした同定の確認要求
- **'this', 理解候補, 抑揚, 知識状態(Fabの方がK+)**
- **直接経験（味覚, 視覚）を資源とした実証的行為構築**

確認内容の否定とアカウント（訂正）
・表情によるスタンス表明

訂正の新情報としての受け止め
・「あ」＋部分的繰り返し

確認要求連鎖の収束
・ミズキの新たな連鎖の開始（11行目）

断片１：味覚にもとづく知識の扱いその1

- 参与者（ミズキ）の味覚にもとづく同定のための**理解の確認**（味覚から得た知識）は，より確認対象（タパスの食材のチーズ）に対して直接知識のある者（ファビアン）によって認識的独立性のあるものとして扱われる
  - 訂正後，更新された理解のもと新たな連鎖の開始
  - 直接知識＝味覚にもとづくのではないが，対象への直接的アクセス
- 同定という事実を扱う行為連鎖では，味覚にもとづく知識（理解）が直接知識よりも認識的優位(Heritage, 2012)を持つわけではない（より事実にもとづく知識の方が優位性を持つ）

(2) マシュマロ・ビーフ [cdin01][13:39](continuation of Ex. 1)
((断片１の続き．ファビアンとリカがコーヒーマシュマロとビーフのタパスを食している．ファビアンが「創作料理」と言っていたこのタパスにリカは興味を示していた．ファビアンは皆がどんな反応を示すか楽しみだと言っていた．))

```
16  RIK:    +あ::う[ね:::?
    rik     >>テルを見てケンを見てファビアン-->>
    fab     +リカを見る->>
17  MIZ:          [*you were going to use it, right?
    miz            *ファビアンを見る                -->
18          *+(0.8)
    miz     *タパスを見る
    fab      +ミズキを見る->>
19  RIK:    it *wor::%k.=
    fab        *リカを見る->
    rik            %今タパスを食している自分の口とテーブルのタパスを指す
20  MIZ:    =taste good.
21          (0.5)
22  MIZ:    *yeah:?
    miz     *タパスを食べている-->
    rik     %マシュマロビーフのタパスを指差す
23  FAB:    yeah.
24  TER:    %un.
    rik     %左手で口を覆いながらファビアンを見てうなづく->>
```

16,19行目：味覚を資源とした評価のデモンストレート
・記述的評価（組み合わせ）+'it'+身体（咀嚼，指差し）
⇒ファビアンを受け手（19行目）

弱い同意？
・味わってからの同意（調理した直接知識のある者）
・同意トークンのみで第二評価の不在→リカの評価を独自の評価として扱い異なる立場を示す？

```
24  KEN:        ふ::::[ん.
25  RIK: →            [う:::ん. interesti::n'.
26  KEN:        ふ::[ん.
27  MIZ:            [ん::::.
28  MIZ?:       %hh hh hh huh huh huh
    rik         %左手で咀嚼？のジェスチャー
29  KEN:        mm hm?
30  RIK: →      超::: yea(h)s::%
    rik                        -->%
31  FAB: →      %yeah?
    rik         %テルを見る
32  RIK: →      %ni::ce
    rik         %頭を戻す->
33              (0.8) %
    rik             -->%
34  FAB: →      yeah it's funny yeah?
35              %(0.5)%
    rik         %うなずく%
36  RIK: →      んん::: (0.2) %zh(h)i: >なんていうの< texture:: iz r'illy
    rik                       %左手で何かを掴むジェスチャー-->>
37  RIK: →      interesting% anz' %the swe- it's sweet and they fit
    rik             .....>%       %うつむき右の方向を見る
38  RIK: →      really nicely::
39  MIZ:        (oh: oka::y.)
```

味覚を資源とした味の評価連鎖を継続

・記述的評価（interesting）＋ 身体 ＋ 咀嚼完了

・upgrade/downgradeの特徴はない

味覚を資源とした食感の評価の言葉探しの開始

言葉探しの完了（断念）

継続子（関心の提示）

食感の評価の代替評価

同意＋異なる評価語（味には非一般的）＋Tag による同意の求め

・作成者としての直接知識（非一般的特徴）にもとづく評価

ファビアンへの同意ではなく独自の評価

・食感，味，組み合わせ（味覚にもとづく）＋upgrade（'really'）

⇒ファビアンの同意に対し自身に帰属可能な味覚にもとづく評価の構築

断片２：味覚にもとづく知識の扱いその２

- ２人の参与者の異なる知識の源泉を利用した評価連鎖：ファビアン（味わった作成者，味覚，直接知識），リカ（味わった者，味覚，直接経験）
  - Nishizaka (2021) 異なる行為構築の資源を区別することで立場の違いを明確にした行為を構築
- 自身の評価を相手の評価への不同意とする形式ではなく，異なる資源（自身に帰属可能な味覚）にもとづいた「異なる評価」として産出（認識的独立性を主張）するため連鎖が拡張しない
  - Hayano (2011) 評価連鎖において，参与者の相対的な知識状態に一致して行為が組み立てられる（e.g., 質問者が受け手よりK-）とき，連鎖は拡張しない
  - 第一評価，第二評価という区別をしない形式？

(3) 生パプリカ[18:38]
((直前でミズキはファビアンの作ったスモークサーモンと生パプリカのタパスを食し，肯定的な評価をした．それに対しファビアンは最後の仕上げとしてレモンペッパーペースト（柚子胡椒）を使用したと述べた．))

```
01  MIZ:      ah::: that's yuzu [*koshoo
    miz                         *リカを見る-->
02  RIK: →                      [has- %+it's got to be good.
    rik                               %ミズキを見る-->
    fab                                +左手を戻す
03  KEN:      [うん.
04  MIZ: →    [*+right, right.
    miz        *生のピーマンを見る
    fab          +ピーマンを吟味する
05  RIK: →    yeah, %yuzu koshoo.
    rik             %テルを見る-->
06  MIZ: →    +so it's good.
    fab       +パプリカを口にいれ咀嚼-->
07  TER:      *う:ん.
    miz       *ファビアンを見る
08            +(3.0)
    fab       +ミズキを見る
08  RIK:      う::ん.
09            +(2.8)
    fab       +視線を逸らせる
```

2, 5行目：ファビアンとミズキのやり取りを聞いて（知識に基づいた）味に関する推測

4,6行目：リカの推測を承認（味わった経験に基づいて理論的評価を支持）

```
10 MIZ: →    right?
11           (0.5)
12 RIK: →    no?
13 FAB: →    hm-↑mm.
14 RIK: →    no? hh
15 TER:      hhh huh-
16           (.)
17 RIK: →    ¥no?¥
18           (0.2)
19 FAB: →    ↑ya?
20 KEN:      hhhhhh
21 RIK:      ahhuhhuh[huhhuh
22 MIZ: →            [it's good. huh::huhhuhhuhhuhhuh .hhh hh .hh hh .hh
23           (0.8)
24 FAB: →    ya, this is not bad.
25 RIK:      [huhhuhhuhhuhhuh
26 MIZ:      [ahhuhhuhhuhhuhhuh
27 KEN:      あれ?
28 RIK: →    ¥okay, what's wrong.¥
29 KEN:      huh huh
30           (3.0)
```

自分たちの評価に対する味わった上での同意の求め

11行目でファビアンからの応答が産出されないのを受けて
極性を否定にし応答を追求（Sacks, 1987）

12行目への否定を味覚にもとづいて産出

13行目の応答を再度確認（否定的応答への傾き）

応答の不在・表情を受けて再度確認

味覚にもとづく否定（抑揚：弱い否定）

否定への反論

ミズキの評価（反論）への味覚にもとづく不同意
（Pomerantz, 1984）

不同意の説明を求める
・自身の理論的評価の妥当性がゆらぐ

```
31 FAB: →    no, becuz the pepper i:z uhm, so the difference +between=
   fab                                                  +パプリカを指す-->
32 FAB: →    =this one,
33 MIZ:      yeah?
34 FAB: →    is that the pepper:: was bo:ild.
35           (.)
36 KEN:      u::[n.
37 FAB: →       [an' this on:e i:z- i:z, the pepper i:[z raw.
38 RIK:                                                [yeah.
39 RIK:      raw. o[ka:y.
40 MIZ:            [oh::::[:::
41 KEN:                   [aa[::
42 RIK:                      [(which one should I(h):-
43 FAB:      so I:- I::- that's really:: e-experimental.<I try::
44 MIZ:      °ja [I want it too°
45 KEN:          [¥experimental¥ .hh hhh [.hh .hh
46 MIZ:                                  [°try the boiled one too.°
47           (2.0)
```

パプリカが生であることを理由にするのではなく，
茹でたパプリカとの対比を意図されたこと
（ファビアンが優先的に持つ知識）をアカウント
⇒ミズキの味覚にもとづく評価の否定を回避

断片3：味覚にもとづく知識の扱いその3

- 3人の知識の源泉が異なっている評価連鎖：ミズキ（味覚；直接経験），リカ（一般的知識），ファビアン（味覚，直接知識）
- この相違をアカウントで明示化することで，直接的に互いの認識的テリトリーを侵害しない不同意の表明により連鎖は拡張しない（cf. Hayano, 2011）
  - 味わうことによる直接経験はそれ自体で認識的優位性を持つものでない
- 味覚にもとづく評価連鎖で異なる知識源泉からなる知識状態が優劣を持たない認識的独立性を主張する志向性？
  - 第一評価，第二評価，第三評価などの評価の順番を相対化をしないことが可能になるのは味覚特有？（cf. Raymond & Heritage, 2006）

２．味覚にもとづく共感的行為連鎖（不満）の構築

共感を必要とする行為およびその応答行為の構築にはどのように味覚の帰属可能性や認識的資源がレリバントなのか（Heritage, 2011; Kuroshima & Iwata, 2016）

(4) わさび [20:04]((断片3の続き．茹でたパプリカのタパスをリカとミズキが食したところ．ミズキは食する前にわさびが使われていることをファビアンに確認し，ファビアンはパプリカ，わさび，サーモンの順に重なっているタパスであることを説明．))

```
00 MIZ:        wasabi::.
01             *(1.0)+(0.5)
   miz         *手で口を覆いながら茹でたパプリカタパスを咀嚼
   rik                 +パプリカタパスを口に入れる
02 MIZ:        *good.
   miz         *ファビアンを見る-->>
03             +(0.5)*(1.5)
               +椅子にもたれる
   miz                 *正面のリカを見る-->
04 MIZ: →      .shh (.) was(h)a(h): hhh [.hh was(h)a- hhh
05 FAB?:                                [hhh
06 RIK: →      わああああ .hhh haha[haha
07 MIZ: →                           [わ(h)%さ(h)び(h) [が(h):-
   fab                                 %口を両手でおおってから両手のひらを合わせる動作
08 RIK: →                                            [¥+結構, 結構::¥
   rik                                                  +左手で口を覆う
09 TER:        huh huh huh
10 MIZ: →      ¥how much [did you put?¥
11 FAB: →                [¥I'm sorry¥ heh heh heh [heh
12 MIZ:                                             [heh heh heh heh
13 RIK: →      +↑あ:::::::. ah huh huh huh .hh
   rik         +左手で鼻をつまむ
14 RIK: →      HHH
```

味覚を資源とした評価のデモンストレート

4-10行目：わさびの量に対する不満の表明

- わさびを味わったことの帰属可能性
- 味覚の刺激の感覚をデモンストレート
- 相手の調理方法を問う

6-13行目：わさびの刺激の感覚を直接経験していることのデモンストレート（不満の対象）

11行目：謝罪によるわさび問題の引責

（不満への共感的応答；自分はまだ食していない）

```
15 FAB: →    %no:: becuz I:- uh: once I bought last year: I was invited by Haruka?
   fab       %指差しを右手でしながらリカに上体を向け，自分を指す
17 MIZ:      n[n.
18 FAB:      uh[:
19 KEN:        [aa.
20           (.)
21 RIK:      Hm-hm?
22 FAB: →    at home? An' %they:- (.) they were using wa:s(h)abi lik(h)a::
   fab                    %バターをなにかに塗るジェスチャーを一回してから何回か繰り返す
23 RIK:      Ri'lly[::?
24 MIZ:            [butter?
25 RIK:      huh huh huh [huh
26 MIZ:                  [huh huh huh huh
27 RIK: →    .hh ¥that's [not really typical Japanese thing.¥
28 FAB:                  [¥so:¥
28 KEN:      [heh heh
29 RIK:      [.HHH
30 MIZ:      [huh huh huh huh
31 FAB: →    [%sorry, sorry,
   fab       %おじぎを2回
32 RIK:      de:mo, it's- it's goo[d.
33 MIZ:                            [it's good.
34 RIK:      [yeah, it's-
35 FAB:      [so what do you prefe[r?
36 MIZ:                            [I like it.
```

15-22行目：なぜこのわさびの量になったかの正当化

・Joke to serious "no" (Schegloff, 2002)– 妥当な理由の存在

・第三者のふるまいを再現することで日本人・外国人カテゴリー化による責任の分散

⇒調理をした者として相手の知覚を理解したことのデモンストレート

ファビアンのカテゴリー化を例外化するも正当化自体は否定されない

⇒K+知識状態にもとづく共感的応答として受入れ

２度めの謝罪：リカの27行目の主張を受け入れ

リカとミズキによるタパスそのものの肯定的評価再提示

⇒連鎖の収束（不満の解消）

断片4：味覚にもとづく共感的行為連鎖の構築

- 味覚の帰属可能性にもとづく不満の表明
- ファビアンによる直接知識にもとづいた受け手の経験（味覚・感覚）を理解したことのデモンストレーションによる引責

⇒直接自身に向けられた不満に対する応答の構築

  - 共感のジレンマ（Heritage, 2011)の対処
  - 実際に味わっていない者でも非対称な知識状態を前提とすることで共感の提示は可能

３．味覚にもとづく義務的行為（提案）の構築

参与者への味覚の帰属可能性が義務的行為の連鎖にどのようにかかわっているのか(Stevanovic & Peräkylä, 2012, 2014)

(5) かつおぶし [M2U000198/kaiseki1103_asho16] [04:19-5:01]
((ディナーの食材としてかつおぶしを買いに砂糖・乾物店に来ている．削り節以前のカツオを見ながらリカとミズキがファビアンにそれを削った削り節を日常的に出汁として使用することなどを説明していると，店員が削り節を試食として勧めてきた．試食のために手拭きを使いながら，かつおぶしの香りと見た目について3人がコメントをしており，リカは子供の頃カツオにかぶりついていたと述べた.))

```
41  MIZ:      <これ> か(h)ぶりつ(h)い(h)て(h)た [hhh
42  RIK:                                        [かぶり[ついてたの.
43  S4:                                                [hh hhh hhh
44  FAB:→     maybe, +I- I- I get an idea: so +I could +do: something=
    fab             +かつおぶしを指差す          +指差す    +ミズキを見る
45  FAB:→     =[with tha:t.
46  S4 :       [ちょっと,
47  MIZ:      [ya.
48  S4:       [%食べて, つ[まんで?
49  MIZ:                  [ya.
    rik        %かつおぶしをつまんで静止-->
49  FAB:      +can I:::
    fab       +店員を見ながら左手でつまむジェスチャー
```

ミズキにかつおぶしの使用を宣言

・人称代名詞 “I” + これからやる行為 + 指差し
・かつおぶしについての知識はほぼない
・義務的地位 deontic status: ファビアン＝ミズキ
（それぞれが調理する予定のため提案ではない）

((省略部分– この後３人がかつお節の試食をする))

```
86                (0.2)
87   FAB:         m::::m.
88                (.)
89   S4:          おいし::?=
90   FAB:→        =+we could do-
     fab           +かつお節を指差してミズキを見る
91   RIK:→        *°yes::°
     miz          *ファビアンを見る-->
92   MIZ:→        yea::h, *'ight, i wa[nto:::,
     miz                  *かつお節を指差す-->
93   RIK:→                             [う::ん, we are going to [do it.
94   MIZ:→                                                      [use it.
95                (0.8)
96   FAB:→        +oka::y.
     fab          +ミズキの指差しを見ている-->
97   MIZ:→        *that on::e.*
     miz          *もう一度指差す*
98   RIK:→        n::.
99                *(0.8)
     miz          *撮影者に試食を提供-->
99   RIK:         [おいし::
100  MIZ:         [do you wanna- hhh
```

FAB: ミズキにかつおぶしの使用を提案

・人称代名詞 “we” + これからやる行為+指差し

・3人共この店のかつお節を味わってかつおぶしについて同等の知識を得ている

・ミズキに発話を宛てる⇒ファビアンとミズキが動作主

MIZ: ファビアンの提案を自身の希望によって受諾

・承認 + 人称代名詞 “I” + ファビアンの”do” → “use”

・ファビアンの提案に従うよりも独立にその結論（同等の義務論的地位を前提）

連鎖を閉じる

RIK: ファビアンの提案に同意

・同意 + 人称代名詞 “we” + “do”

・料理を補佐する役割（義務論的地位が低い）

直前の ”it” の言い換え（連鎖を閉じる）

断片5：味覚にもとづく義務的行為の構築

- 味覚によって得られる特定のかつお節に関する知識が義務的行為（提案）の構築に利用される
  - 異なる義務的地位（調理する者，しない者）を顕在化させる
  - 知識がなかった者→受け手と同等の知識状態になる
  - 同時に試食する→両者にとって提案者に味わったことが帰属可能
- 提案行為には提案者と受け手が提案内容について同等の知識を持っていることが前提となるという志向性
  - 断片5ではその知識を味覚によって得た

まとめ

- 味覚は行為を構築する資源となる
  - 同定のための実証的確認要求
  - 評価への同意・不同意が味覚にもとづいていることをデモンストレート
- 味覚は知識の源泉となり，様々な行為の構築の資源となる
  - 味わったことの帰属可能性による不満の構築
  - 味わうことで得た知識を資源とした提案の構築
- **味覚による直接経験は，直接知識や一般的知識よりも認識的優位性があるのではなく経験者の認識的テリトリーに属する認識的独立性がある**
  - 直接経験を持たなくても同じ味覚を，直接知識によって理解することは可能で，互いのテリトリーを侵害しない形式をとる（e.g., 同定，評価，不満）
  - 同じものを食べた経験は同等の知識状態にあるとみなされる（e.g., 提案）
- 視覚，触覚，聴覚などとの類似・相違，知覚を源泉としない知識にまつわるやりとりとの比較やプラクティスの記述

参考文献

Cekaite, A. & Mondada, L. (eds.) (2020). *Touch in Social Interaction: Touch, Language, and Body*. Routledge

Hayano, K. (2011). Claiming epistemic primacy: Yo-marked assessments in Japanese. In T. Stivers, L. Mondada, & J. Steensig (Eds.), *The morality of knowledge in conversation* (pp. 58–81). Cambridge University Press. https://doi.org/10.1017/CBO9780511921674.004

Heritage, J. (2011). Territories of knowledge, territories of experience: Empathic moments in interaction. In L. M. Tanya Stivers & J. Steensig (Eds.), *The morality of knowledge in conversation* (pp. 159–183). Cambridge University Press.

Heritage, J. (2012a). Epistemics in action: Action formation and territories of knowledge. *Research on Language and Social Interaction*, *45*(1), 1–29. https://doi.org/10.1080/08351813.2012.646684

黒嶋智美. (2021).「医療記録を「読むこと」と「見ること」の会話分析」『日本保健医療社会学会論集』31: pp. 67-77.

Kuroshima, S. (2021). Therapist and patient accountability through tactility and sensation in medical massage sessions, *Social Interaction: Video-Based Studies of Human Sociality, vol. 3*, no. 1.

Kuroshima, S., & Iwata, N. (2016). On displaying empathy: Dilemma, category, and experience. *Research on Language and Social Interaction*, *49*(2), 92–110. https://doi.org/10.1080/08351813.2016.1164395

Mondada, L. (2018). The multimodal interactional organization of tasting: Practices of tasting cheese in gourmet shops. *Discourse Studies*, *20*(6), 743–769. https://doi.org/10.1177/1461445618793439

Mondada, L., 2021. Sensing in Social Interaction: The taste for Cheese in Gourmet Shops. Cambridge: Cambridge University Press

Nishizaka, A. (2017). The perceived body and embodied vision in interaction. Mind, Culture, and Activity, 24(2), 110–128. https://doi.org/10.1080/10749039.2017.1296465

Nishizaka, A. (2021). *Paper for DISCOURSE STUDIES Title: Seeing and Knowing in Interaction : Two Distinct Resources for Action Construction*. *8293*, 1–35.

Nishizaka, A. (2022). The granularity of seeing in interaction. Journal of Pragmatics, 190, 24–40. https://doi.org/10.1016/j.pragma.2021.12.016

Pomerantz, A. (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis* (pp. 57–101). Cambridge University Press.

Schegloff, E. A. (2001). Getting serious: joke → serious 'no''.' Journal of Pragmatics, 33(12), 1947–1955. https://doi.org/10.1016/S0378-2166(00)00073-4

Stevanovic, M., & Peräkylä, A. (2012). Deontic authority in interaction: The right to announce, propose, and decide. *Research on Language and Social Interaction*, *45*(3), 297–321. https://doi.org/10.1080/08351813.2012.699260

Stevanovic, M., & Peräkyläa, A. (2014). Three orders in the organization of human action: On the interface between knowledge, power, and emotion in interaction and social relations. *Language in Society*, *43*(2), 185–207. https://doi.org/10.1017/S0047404514000037

Wiggins, S. (2002). Talking with your mouth full: Gustatory mmms and the embodiment of pleasure. *Research on Language and Social Interaction*, *35*(3), 311–336. https://doi.org/10.1207/S15327973RLSI3503_3

Wiggins, S., & Keevallik, L. (2021). Enacting gustatory pleasure on behalf of another: The multimodal coordination of infant tasting practices. *Symbolic Interaction*, *44*(1), 87–111. https://doi.org/10.1002/symb.527